

遠江における高天神城

静岡大学名誉教授・文学博士
小和田 哲男

はじめに

1. 高天神城の歴代城主を追う

通説による歴代城主

出典

『高天神城戦史』

『高天神の跡を尋ねて』

確実なのは福島氏からか

今川氏親の側室

「福島安房守女」

「福島左衛門女」

福島左衛門尉助春

	在城者名	在城時期
1 城代	山内玄蕃正久通	応永25年～永享元年
2 城主	福島佐渡守基正	文安3年～享徳3年
3 城番	山内玄蕃正久通	享徳3年～?
4 城主	福島上総介正成	文明3年～永正17年
5 城番	小泉左近	?～?
6 城代	浅羽弥九郎幸忠	長享元年～明応5年
7 城番・ 城代	小泉左近	明応5年～?
8 城番	金沢玄蕃正	?～?
9 城主	小笠原右京進春儀	天文5年～天文11年

2. 小笠原与八郎長忠をめぐって

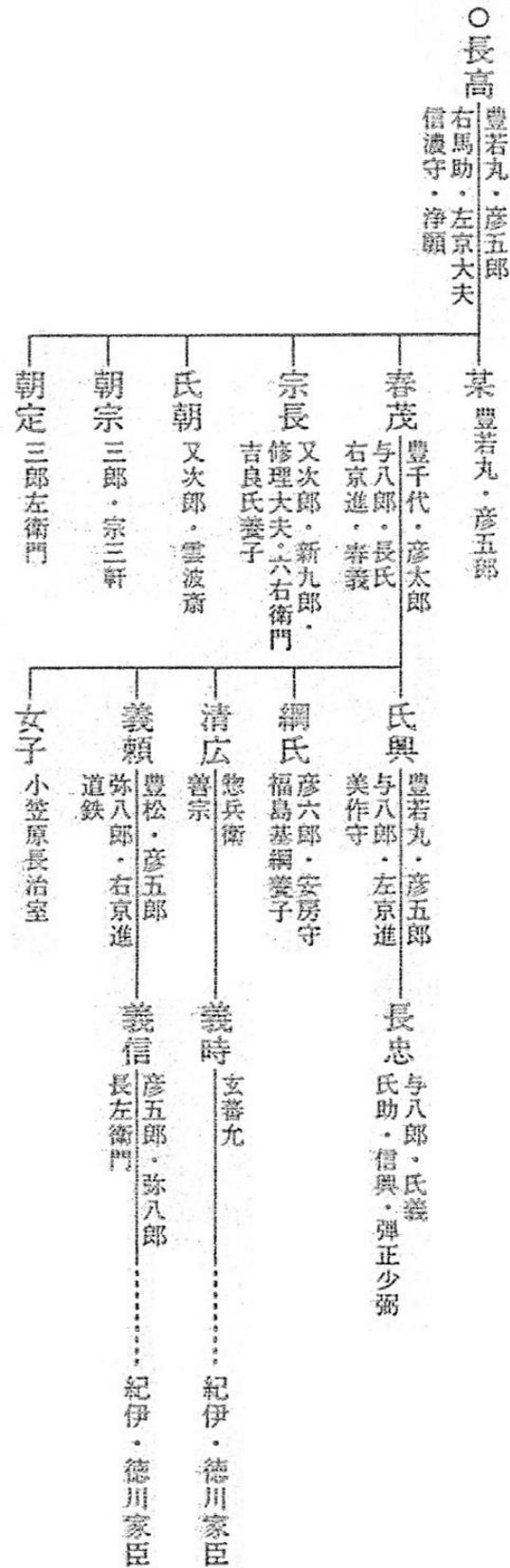
名乗りの長忠は各種軍記物から 正しくは氏助

信濃の小笠原氏と遠江の小笠原氏の関係とは

馬伏塚城主 小笠原氏

春茂（春儀・春義）のとき高天神城主となる？

小笠原氏系図



前田利久作製「小笠原氏系図」
(小和田哲男編『今川義元のすべて』)

小笠原氏助が高天神城主となったのはいつか

氏興の死による家督交代か 生前の家督交代か

3. 徳川家康に降る小笠原氏助

「遠州念劇」と遠江の旧今川義元家臣の動向

永禄8年(1565)説

永禄11年(1568)説

一、辰ノ十二月、小笠原新九郎三州野田ノ士
元来御味方、仰セ付ケラレ、遠州馬伏塚ノ小笠原与八郎長忠方江遣ワサレ候。
此与八郎ハ、原・小笠原トテ、其以前、遠州城東郡ヲ兩人シテ領知仕リ候。近代、原ハ絶テ、小笠原計リ罷
り成リ、殊ニ今川縁者也。威勢之有ル処ニ、氏真ノ弱ヲ見テ、秋山方江人質ヲ出シ、甲州江降参仕ル可シト
支度ノ処江、新九郎、理ヲ尽テ異見申、御味方ニナシ、新九郎同道ニテ伺公。御礼申上候。

永禄八年十二月、家康公三州幅豆郡(播)ノ小笠原新九郎安元ヲ召テ、遠州高天神ノ小笠原与八郎長忠ヲ御幕下へ
来ラシム。安元ガ此ノ功ヲ悦ビ給ヒテ、三州赤羽根・芦・赤沢三ヶ邑ヲ安元ニ給ルト。

「田原近郷聞書」
(『豊橋市史』第5巻)

「浜松御在城記」
(『浜松市史』史料編一)

扱又、馬場美濃守・内藤修理・高坂弾正・山県三郎兵衛申は、さあらば、来年の御備定、女中いづかたへ御働なさるべきと申候へば、信玄公、上方侍衆内通申上る書付を取出させ給ひ、御覽候へば、遠州高天神の城主小笠原被官共、江州姉川合戦に抜出たる走廻りいたし、信長・家康讚たる武士は、渡辺金太夫・林平六郎・吉原又兵衛・伊達与兵衛・中山是非ノ介、五人と書付にあり。信玄公仰らる。是等は若手の者、老功、中老、或八十九・二十の者迄、戦功を心懸たるよき侍、あまたかゝへ持候。小笠原与八郎もわかしといへども、家康におとらぬ、高天神も武篇の家なれども、小身故、今川氏真牢人せられてより、家康旗下になり候。なん時信長と合戦あらば、家康を斬くつす事、肝要也。家康との合戦には、小笠原家中高天神衆、手に立べく候間、来春は遠州きとうぐん筋へ働候て、小笠原が弓箭のふりを、当家さき衆・二の手衆に勘弁さすべく候間、家康衆の事は、我家の秋山伯耆守、一両度も当りて知ル。三川の国山家三方衆、此方へ帰伏なれば、大形家康衆あてがひは、しれて有。さ候へば、来春は高天神表へ働、夏中三川へ働、信長と家康間を取切ル。

…斯くて、先隊酒井・水野、鳥銃を打懸けて戦を始め。爰に小笠原長忠が手より、伊達与兵衛定鎮、吉原又兵衛、林平六、中山是非之助、伏木久内、群(抜)に技んで先登し、畠の中を往き、堤の下に於て各鎗を合す。門奈左近右衛門俊政、渡辺金太夫照は、堤の上を往き、鎗を合す。しかるに門奈は、猿の皮の投頭巾を、頭形の兜にかけて著し、地水火風空の前立物顕然として捺物(さしもの)をば指さず。渡辺は、朱の雨笠に、金の短冊十八枚付けたる大捺物を指す。故に川向より、信長遙かに見給ひて感悦斜めならず。戦(あつり)畢て、七人共に感状を賜はり、大に賞せらる。殊に渡辺には、日本第一の鎗といふ文字を加へて、帯し給ふ所の貞宗の脇指を与へらる。酒井忠次、水野、大須賀、小笠原長忠以下、三遠の諸士、競ひ掛つて突戦す。

(中略)

その長忠が従士小池左近、横井六郎兵衛、高須武太夫、朝比奈縣、松下平八、大須賀が手にては、久世三四郎、坂部三十郎、渥美源五郎、鷲山伝八を初めとして、三遠の鋭卒、競い追崩しければ、敵軍大に敗北し、右往左往に逃げ走る。

『四戦紀聞』の「江州姉川戦記」

『甲陽軍鑑』品第三十七